

12. トルコ鞍拡大と巨大甲状腺

医学部2年

大和田由理, 柿下優衣

【目的】解剖学実習の際に発見された, トルコ鞍の拡大と巨大甲状腺生成の原因を解明する.

【対象及び方法】解剖学実習で解剖させていただいたご遺体で見つかった, 拡大したトルコ鞍と肥大化した甲状腺を対象とした. その原因と病態に関して病理学講座や臨床の先生方からご協力をいただき, 病変組織のHEおよび免疫染色, インタビューおよび文献を用いた調査を行った.

【結果】HE染色により, トルコ鞍の拡大については成長ホルモン産生細胞由来の下垂体腫瘍が原因であると思われた. 甲状腺肥大については, 免疫染色により, 悪性リンパ腫の一つであるMALTリンパ腫が原因だということがわかった.

【考察】下垂体腫瘍は成長ホルモン産生細胞由来と思われ, このことはご遺体に末端肥大症の所見が見られたことにより強く示唆された. 下垂体腫瘍と甲状腺の肥大が同時に認められたことから, 甲状腺刺激ホルモンを介した両者の関連が疑われたが, 結果としては関連性を見出すことができなかった. 肉眼所見だけでなく, 病理学および生化学的手法を併用して診断に至ることの重要性が示唆された.

13. 臨床看護学実習の指導の実際—透析看護に携わる指導者をとおして—

看護学部 成人看護学 (慢性期)

鈴木美津枝, 村上礼子, 鈴木純恵

【目的】看護師が看護学生にどのようなことを学んでほしいと思いつ指導しているのかを明らかにし, 今後の臨床実習のあり方の検討資料とすることを目的とした.

【対象】透析室で看護学生に現在指導をしている, 或いは指導経験のある看護師で研究参加に同意が得られた6名を対象とした.

【方法】データ収集は半構成面接法で, 約30~40分行った. 面接内容は, 対象者の了解のもと録音し, 逐語録にした. 分析は, 一文章一意味に区切って分析の最少単位とした. さらにこれらをもとに類似性に沿って, 質的帰納的に分類した. なお, 妥当性の確保のために分析過程において, 研究者間で討議・検討を行い, 統一の理解を得てから次の段階に進む手順で実施した.

【結果】透析看護に携わっている看護師は, 多くを学ぶというより, 患者の苦痛だけでも感じてくれたらいいという思いを抱き指導していた. 実習目的を理解している場合は, 透析療法の説明や患者と話ができるようにするなどを学生と関わり, 理解していない場合は, 対応が分からないため積極的に関わっていなかった. また, 学生の実習意欲を感じると色々と説明し, 意欲があまり見られない反応には寂しくなり, 実習成果は実習の様子や記録から感じとっていた. しかし, 忙しい時間帯や実習時間の短さなどから実習指導の限界も感じていた.

【考察】実習環境の整備, 実習内容の検討や指導者の指導意欲の向上支援の必要性が今後の教員の課題として示唆された.

【結論】臨床には, 実習の目的・目標を明確に伝え, 実習時期や時間, 目的・目標の適切性, 実習内容などを意見交換していく, 実習記録やレポートを臨床へフィードバックしていく. 学生には, 実習の目的・目標を明確に提示したオリエンテーションの実施, 指導者へのアプローチ方法の工夫などを話していく.